

## 美術教育における遠隔地を結ぶ取り組みについて（Ⅰ）

中川 泰（長崎大学教育学部）

井手 淑子（佐世保市立宇久中学校）

江口 邦裕（時津町立時津北小学校）

### Ⅰ. はじめに

本研究のコンセプトは、美術教育の領域で教員養成大学における幼大連携あるいは小大連携あるいは中大連携によって、参加する幼稚園・保育所や小学校や中学校の子どもに対して、普段の教育活動をより豊かにする活動、普段の教育活動にはない意味ある活動を保障することにある。また、近い将来に美術教育を指導する教員となる大学生や大学院生に対して、子どもと関わる仕事の魅力ややりがいについて学ぶ場を実現させることにある。

本稿では2年間継続させてきている長崎県・五島列島最北端の島である宇久島の中学生と長崎大学教育学部の大学生との交流を扱う。本研究の目的は“交流に伴う教育実践（2014年4月～2015年3月）に関わる記録”と“今後の小大連携と中大連携等の方向性を模索するための基礎資料”を整理することにある。

### Ⅱ. 生徒作品の鑑賞を通じた交流

宇久中学校は宇久島で唯一の中学校である。全校の生徒数は29名、学級の生徒数が8～15名と少人数である。真面目で素直な良い面がある一方で、自己表現が苦手で向上心に欠ける生徒が多い。学校全体でもコミュニケーション能力の向上を目指して様々な活動に取り組んでいるが、幼少期から一緒に育ってきた仲間同士は気心が知れた関係であり、表現における努力の必要性を感じない生徒も多いようである。

美術科の授業においては、生徒作品の相互鑑賞で良さを発見し合うことや、自らの表現意図を發表することに課題が見られる。そこで、鑑賞を通じた中学生と大学生との交流を図ることで、生徒が楽しみながら自己表現力を育成できる機会を設ける。“生徒作品の鑑賞を通じた交流”のねらいは、以下の2点にまとめられる。

- 新たな視点から自分の作品の良さや課題に気づき、より良い作品づくりを行う意欲を喚起する

○外部との交流を通して、生徒のコミュニケーション能力の育成を目指す

1年から3年までの全学年で、“生徒作品の鑑賞を通じた交流”を実践しているが、各学年の作品形態や課題に応じて、その方法を少しずつ変えている。

共通しているところは以下の通りである。[註1]

- ①事前の自己紹介ビデオを交換する  
…大学生から送られた自己紹介ビデオを受けて、一人ひとりの自己紹介ビデオを撮影する
- ②作品完成後、振り返りシートに記入する  
…発表する原稿とするために、伝えたい思いや工夫を具体的に書かせる
- ③発表ビデオを撮影する  
…作品振り返りシートを基に、大学生へ向けて作品発表を行う映像を撮影する
- ④発表ビデオ、作品写真（3年は作品の現物）、鑑賞ワークシート（大学生記入用）を大学へ送付する
- ⑤大学生からのコメントをもらう  
…大学生は鑑賞の手順に沿って鑑賞し、鑑賞ワークシートに記入し、それを中学校へ送付する
- ⑥大学生への手紙を送付する  
…大学生からもらったコメントを読み、返事をまとめる

各学年で行った題材の説明と、交流活動において学年ごとに変えた部分は以下のとおりである。

□ 1年 題材「Let's 宇久島アート！」

ねらい：表現意図に応じて素材を工夫して組み合わせ、心豊かな造形活動に取り組む

その内容は島おこしを目的とし、“宇久島アートフェスティバル”というアートプロジェクトに関わるものである。それは現代美術作品を発表している県内の作家が宇久町の空き家で作品展示を行うもので、それに連動させて、1年生の授業では“アートフェスティバルの作品展示をもし自分が行うとしたら？”という視点で立体作品のミニチュアをつくらせる。共通テーマを「宇久島」とし、そこから連想されるキーワードを基に各自のテーマを決定させる。材料は粘土や宇久島の浜辺で拾った貝殻、流木、シーグラス、和紙などである。また、空き家で展示するということも意識させ、作品が完成した後は空き家の写真と合成することも事前に提示する。

大学生へは発表ビデオの他、作品写真のみと、空き家との合成写真の両方を提供する。大学生は、まず、作品写真のみを鑑賞し、“作品から想像されるストーリーやイメージ”を鑑賞ワークシートに記入する。次に、空き家との合成写真を鑑

賞したり、発表ビデオを視聴したりして、“感想やアドバイスなど”を鑑賞ワークシートにまとめる。

□ 2年 題材「不思議な動物をつくろう」

ねらい：粘土表現に親しみながら、想像力豊かな造形活動に取り組む

好きな動物を3種類組み合わせ、新しいオリジナルの動物を考えさせ、アイデアスケッチを描くところからスタートさせる。スケッチの際に動物の名前や主食、生息地、鳴き声など細かな設定まで考えさせ、想像を膨らませることができるようにする。その上で粘土による立体的な造形につなげる。制作中は動きのあるポーズを意識させる。

大学生へは発表ビデオと作品を様々な角度から撮影した写真を提供する。大学生は、まず、作品写真のみを鑑賞して“その動物から想像されるストーリーなど”を鑑賞ワークシートに記入する。次に、発表ビデオを視聴し、作品から想像を膨らませ、鑑賞ワークシートをまとめる。

□ 3年 題材「おかしなお菓子のパッケージデザインをつくろう」

ねらい：配色やレイアウトなどを工夫し、独創的で効果的に伝わるデザインを作成する

3年の生徒は最も自己表現が苦手であり、美術の制作に対する意欲もとても低い状況にある。その対策として、生徒にとって興味・関心の高いパソコンを使っただけの表現をさせることにする。まず、面白いお菓子のアイデアをださせた後、市販のお菓子のパッケージから特徴や工夫を分析し、それを参考にしてWordソフトを用いてデザインを決めさせる。途中、レイアウトや配色、文字の大きさや形、図柄などの重要性を理解させ、修正を加えさせる。そして、光沢紙にプリントアウトし、表と裏のデザインを貼りあわせて中にクッション材を入れ、お菓子の袋を模した作品をつくらせる。

大学生へは作品の現物と発表ビデオを提供する（生徒に鑑賞させる段階で、“大学生が作品を見たときの反応を生徒に見せたい”という井手の願いがあり、箱から作品の現物を取り出すところからのビデオ撮影が依頼された）。大学生は、作品の現物を鑑賞し、発表ビデオを視聴して、自由に鑑賞ワークシートをまとめる。

中学校と大学との交流による“中学校の学習成果”を学年ごとにまとめると以下のようなになる。

□ 1年

制作前から大学生に作品を見てもらうことを伝えたところ、制作意欲が向上した。アイデアスケッチの説明も相手を意識して、わかり易く記述する生徒が増えた。大学生の自己紹介ビデオは大変好評であり、交流することに現実味が帯びてきたようであった。

作品制作は完成度を高めようと粘り強く取り組む生徒が多かったので時間がかかったが、普段あまり意欲的ではない生徒も積極的に居残りをして最後まで完成

させることができた。作品鑑賞で大学生からもらったコメントは以下のようにまとめられる。

- ① 作品を見て想像されるストーリー、イメージなど
- ② 作品の面白さ
- ③ 発表映像を見てのアドバイス
- ④ 感想、メッセージ



図1 宇久島を表した作品



図2 「海」がテーマ

①に分類される内容は「写真と題名から砂浜と海の境目だと想像した」「海の中に住む魚、貝殻、木の枝はサンゴを表現しているのかと思う」「一つの島が生き物のよう。海の上を移動するイメージ」など、作品写真から感じたイメージを素直に表したコメントである。

②に分類される内容は「吊るしている貝殻の高さが違うのでより自然な海を想像できる（図2）」「貝殻で鱗や鰭を表現しているのが面白い」など、工夫した点について評価するコメントである。山をテーマにした作品に「宇久島は海のイメージだったので意外だった」という大学生の意見があり、それに中学生も驚いたのである。お互いに新鮮な発見があったようである。

③に分類される内容は図2の容器の蓋を「透明にした方が、より光が入って美しくなる」という意見や、図1の「時が経過して無人島になってほしくない」という生徒の作品に込めた思いを受けて、「作品の中に人を入れてはどうか」というアドバイスがある。

④に分類される内容は「見る側が物語や作者の思いを想像できる作品。自分のこだわりや思いをこれからも大切にしてほしい」や「実際に触れて遊べる要素が面白い」という良さについての感想、「構図が面白い」や「実物に光をあてて鑑賞したい。いろいろな置き場所を考えると楽しい」など、新しい視点を提供するコメントがある。大学生からのコメントを受けて、中学生は「自分のイメージしたことが伝わって良かった」「たくさんほめてもらって嬉しい」と喜び、アドバイスを受けて次に生かしたいと意欲を湧かせることができたのである。

## □ 2年

大学生との交流を伝えてから制作意欲が大幅に向上した。完成度を高めようと粘り強く作業する生徒が増え、授業は全員が黙々と取り組んでいた。放課後の居残りも積極的に参加し、これまで提出期限を守ることはできなかった生徒も決められた時間内に最後まで完成させることができた。

作品鑑賞で大学生からもらったコメントは以下のようにまとめられる。

- ① 作品を見て想像されるストーリー、イメージなど（生息地や生態など）
- ② 作品の面白さ
- ③ 発表映像を見てのアドバイス（肉づけ、彩色、ポーズ、仕上げなど）

#### ④感想、メッセージ



図3 猫と蛇と鳥の合体

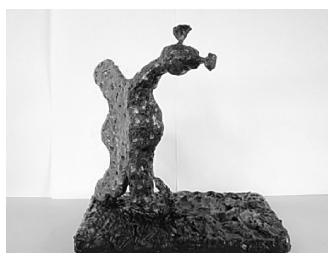


図4 蝶とタツノオトシゴ



図5 猿と蛇（ぬえ）

①に分類される内容は例えば、図3の作品について「暗い森の木の幹にあいた穴に住んでいる」というコメントがある。その他の作品に対しても、すべて名前（作品名）や組み合わせられている動物、色などから発想を膨らませているものである。

②に分類される内容は「青と茶の組み合わせが興味をひく（図4）」などの彩色の工夫や、躍動感あるポーズの工夫、動物の組み合わせの発想などを評価するコメントである。

③に分類される内容は多くの的確な助言が含まれている。例えば、図5に対して「顔の向きや体をひねらせると良い」など、動きのあるポージングについての助言がある。また、手足や耳など細部の表現や、筋肉のつけ方についても具体的なコメントがある。

④に分類される内容は彩色の丁寧さや表情など、どの作品に対しても必ず良い所を具体的にあげ、ほめるコメントばかりである。「これからも工夫をこらしながら作品づくりをして下さい」など、今後の制作意欲につながる励ましも添えてあり、生徒は大変感銘を受けていたようである。

生徒の反応は殊に、①に分類される内容に集中し、自分の意図と異なる受けとめ方があることに気づき、新鮮な驚きを感じる生徒が少なくなかったのである。また、工夫が効果的だと評価され自信をもった生徒や、助言をもらい今後の制作に生かそうと意欲を高める生徒が多くいたのである。これらのことは大学生の中学生への影響力の大きさを示している。

#### □ 3年

全学年で3年の変容が最も大きかったことが特筆できる。大学生の自己紹介ビデオを鑑賞してから、制作への集中力が格段に上がり、質の高い作品を完成させることができたのである。デザインという相手を意識した題材であったことが、大学生という具体的な表現相手を得たことで功を奏したと考えられる。また、興味があり技能も概ねもっているパソコンによる表現方法も生徒の実態に合致したものであった。「早くもち帰りたい」という生徒もあり、自分の作品に愛着や自信をもてたのではないかと思われる。



図6 「力餅」

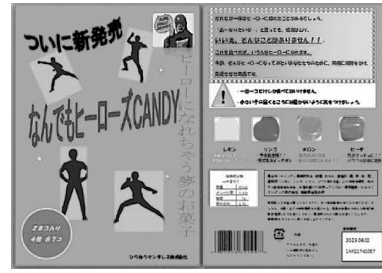


図7 「なんでもヒーローズCANDY」

大学は“中学生の作品との出会いから大学生がそれぞれの作品について感じたことを発表するまでの映像”を撮影して、中学校へ依頼通りに提供したのである。その映像は中学生に鑑賞され、授業で大きなモチベーションを与える役割を担ったようである。後日、「自分の作品を見て大学生が驚き感心する様子は、生徒にとって新鮮だったようで、嬉しそうに見つめていた」「大学生から中学生の作品へのコメントは、“自分が食べたい”という視点で選んだ作品について、主にお菓子の発想の面白さを述べるものであった」などといった報告を中学校から受けた。大学生にとっても貴重な経験になったと感じている。

### Ⅲ. 中学生と大学生による共同制作

題材「ドリームツリー」は中学生と大学生による共同制作で、中学校の参加学年は全学年である。その活動の流れは以下のようにまとめられる。

- ①大学の企画を受け、中学校は全学年で将来の夢についてアンケートを実施する
- ②アンケートの結果と全学年の生徒が写った写真（行事や学校生活の場面）を大学に送付する
- ③大学生がアンケートや写真を基に“ドリームツリー”を完成させる
- ④大学から送付された“ドリームツリー”を中学校が掲示し鑑賞する

中学生に主体的な活動をさせるためには、自分に自信がもてなかったり、恥ずかしいという思いがあったりして、将来の夢を正直に話せない生徒への処置がポイントになる。アンケートを無記名にしたことも、正直な気もちの記載につながったようである。結果として、生徒全員の回答が回収できたのである。それらは表にまとめ直され、大学へ送付された。

生徒写真については“ドリームツリー”のコンセプトが「普段の頑張りが未来につながる」ということだったので、できるだけ日常生活の写真を探していたのだが、あまり見つけることができなかつたそうである。宇久中学校は行事が多く、行事へ向けた練習などを日々の生活で行っているとのことで、写真を選出する幅を広げ、行事なども含めた写真の中から選ぶことになったそうである。ここでは生徒の全員が必ず1回は写っているように配慮されている。

完成作品は誰もが毎日通る場所である生徒玄関の下駄箱横に掲示用パネルを設置して展示されたのである。「イラストがかわいくて、とてもわかり易かったし、詳しく描かれていたので、すごいと思った」「たくさんの夢が実に描かれていたので、良いなと思った夢（実）をとってみようというイメージがわいた」「宇久中学校の全員の夢をまとめたのが良い」などといった感想が後日、中学生から大学生へ寄せられている。



図8 生徒が作品を鑑賞している様子



図9 展示された「ドリームツリー」

「生徒作品の鑑賞を通じた交流」と「中学生と大学生による共同制作」は並行して実施されたのであるが、ここで井手から大学生へ向けてのメッセージを以下にまとめる。

□「生徒作品の鑑賞を通じた交流」で良かったこと

自己紹介ビデオが楽しい雰囲気工夫されていて、とても良かった。生徒はこのビデオを嬉しそうに笑顔で鑑賞していた。これからの交流を楽しみにしているようであった。作品鑑賞のコメントでは、どの作品に対しても必ず良い所を見つけて評価してくれたことがありがたかった。「たくさんほめてもらって嬉しかった」と多くの生徒が感想に書いており、生徒にとって何よりの励ましになったと思われた。また、感じたことをとても素直に表現するコメントばかりで、語彙力の豊富さに感心した。アドバイスは具体的で、生徒の思いを汲んだものだったので、とても参考になるものだった。制作途中でそのアドバイスを聞いたらまた違う作品になっていたのかもしれない。

□「生徒作品の鑑賞を通じた交流」についての課題

大学生の数が中学生の数に比べて少なかったため、大学生に一学年あたり2～3名で分担してもらうことになった。こちらの生徒数が6名、15名、8名とばらつきがあったため、生徒15名に大学生2名で担当する状況に陥った。負担が大きかったのではなかろうか。作品鑑賞のコメントは生徒の良さをたくさん発見していただく良い内容だった一方で、中学生には難しい漢字が散見された。3年生のパッケージデザインに対しては客観的な視点でコメントが欲しかったこともあり、「自由にコメントしてください」というリクエストを提示した。その表現方法のためか、少し物足りないコメントが多かったの

は否定できない。つまり、大学生はとても素直に感じたことを記載したため、お菓子のアイデアについての面白さに言及するものが多く、中学生が工夫をしたレイアウトや配色などのデザインの要素についてあまり触れられていなかった。

□「中学生と大学生による共同制作」について

大学生が主導し、具体的なイメージを提供してくれたので、作品資料の準備がスムーズにできた。また、こちらの負担を軽くなるように配慮してもらったことはありがたかった。今回と同様な活動を展開する機会があるとすれば、大学生が主導しつつ、中学生と大学生が相互にアイデアをもちよる作品づくりができると、より良い活動になるのではなかろうか。

□「生徒作品の鑑賞を通じた交流」と「中学生と大学生による共同制作」の総括

大学生と交流できたことは、島外との関わりがほとんどない中学生にとってかけがえのない貴重な経験となった。また、美術を専門的に学んでいる大学生は中学生にとって憧れの存在であり、その大学生から助言や評価をもらったことは、大きな励みになったはずだ。準備やコメント作成など大変な面がたくさんあったと思うが、中学生一人ひとりに丁寧に向き合ってくれた大学生に大変感謝している。「自分もたくさんのことを学ばせていただくことができた」という大学生の言葉が心に残っている。今回の活動が教員を目指す大学生の皆さんにとって、少しでも糧になれば幸いである。

#### IV. まとめ

井手は今回の中大連携を通して、制作途中での“意欲の向上”という予期せぬ効果を指摘する。2年生は制作途中に交流が決まったため、それ以前の取り組みとの間に格差が発生したのである。美術が好きな学年であったため、それまでも真面目に活動していたが、交流することを伝えてからは、準備を急いで行う姿や、脇目もふらず黙々と制作する姿や、放課後の居残りに積極的に参加する姿など、意欲的に取り組む姿が増えたのである。また、最後まで細部にこだわって丁寧に制作する生徒も増えたのである。更に、生徒同士で「これどんな風に見える？」といったやりとりが増え、作品の客観的な見え方を求めるようになっていったのである。これらのことから、作品づくりが自己満足で終わらず、他者への表現であることを生徒が認識していると考えられる。一方、美術に対して苦手意識が強く、意欲向上が課題の3年生でも、私語が少なくなり、熱心に取り組む姿が見られるようになったのである。その結果、細部まで表現にこだわり、完成度の高い作品を仕上げることができたのである。

大学生の作品へのコメントには、多くの気づきやアドバイスがある。少ない仲間では得ることができない新しい意見であると同時に、美術の専門的な意見である。「自分が考えきれないことをアドバイスしてもらえたのが良かった。自分の作



品を見て、イメージやストーリーを膨らませてもらって楽しかった」「自分が気づかないような部分に気づくことができた」という中学生の感想から、「生徒作品の鑑賞を通じた交流」のねらいである「新たな視点から自分の作品の良さや課題に気づかせ、より良い作品づくりを行う意欲を喚起する」をある程度達成できたと評価する。

もう一つのねらいである「外部との交流を通して、生徒のコミュニケーション能力の育成を目指す」については課題が残る。中学生と大学生とのコミュニケーションは、自己紹介ビデオ、作品を通してのコメント、手紙のやりとり、共同制作における資料提供と掲示作品の鑑賞といった、一方通行の連続であり、直接的な関わりをもたせることが難しかったのである。作品制作が思うように進まず、自己紹介ビデオを交換してから鑑賞コメントまでに大きなタイムラグが発生し、活動そのものが少し間延びしたように感じる。今後はコミュニケーションの方法を工夫し、やりとりの回数を増やしたり、スカイプなどの通信を使用したりするなどの改善が必要であろう。

次に、ほぼ30年の教職歴を有する江口の「離島勤務について」のコメントを紹介する。彼は1993年4月から1997年3月までの4年間、若松町立間伏小学校（現新上五島町立若松中央小学校）で3年間、若松町立大平小学校（廃校）で1年間、教鞭を執った経験がある。

#### □離島勤務に向けて

心配しなくても良いところは、人柄です。都市部の子どもと比較すると、島の子どもは素直です。やんちゃな子どももいますが、子どもらしいかわいさがあります。保護者・地域の方々は学校に協力的です。担任として、とにかく全力で仕事をすれば、失敗することがあっても、わかってもらえます。そのあたりは、都市部でも同じことが言えますが、離島では、より一層強く感じられます。離島勤務に不安をもつことはあるでしょうが、赴任したら積極的に地域へでて行きましょう。地域の皆さんは、“先生”を大切にしてくれます。

#### □準備しておいた方がよいこと

##### ①教材・書籍など

離島の学校でも最低限必要なものはそろっていますが、その他に必要なものがでてきた場合、手に入りにくいのです。例えば、「授業の導入に使う、インパクトのある写真が欲しい」とか、「図工で漁船の絵を描くけど、どんな実践があるのか」など、教科書以外に調べたいこと、授業前に必要な情報はいくつもあります。大学は、図書館があり、大きな書店もあり、困った時に様々な資料を手に入れやすい環境と言えます。しかし、離島ではそうはいきません。現在では、インターネットを活用することで、状況はかなり改善されているとは思いますが、不自由な部分是不会変わらないでしょう。そこで、「これは使えそうだな」と思える資料や写真があったら、データとして保存したり、コピーしてファイルしたりしておくことをお勧めします。それらを整理して、必要

な情報や教材をすぐに使える状態にしておくことが大切です。書籍についても同様で、名著といわれる教育書も、可能ならば購入して読むことを考えましょう。

## ②進んで学ぶ姿勢など

離島勤務の前に、都市部で勤務する機会があれば、先輩の先生に多くのことを学んでおくことが大切です。離島では学校の規模が小さくなります。同じ町内にある学校数も少なくなるため、話を聞くことのできる先輩の先生の数も限られてしまいます。都市部で、職員数が多ければ、チャンスが増えます。国語科なら〇〇先生、算数科なら△△先生、といった具合に、それぞれの先生が得意とする分野をもっておられます。チャンスを捉えて、教えてもらう気持ちを大事にしましょう。また、授業だけではなく、学級経営の方針について話を聞いたり、掲示物、壁面構成の工夫など教室環境を写真に撮らせてもらったりしておくこと、大変参考になります。給食当番表や、プリントを掲示する場合でも、場所や掲示の仕方など、ちょっとした工夫で、児童も先生も見易く、活動し易くなります。“これは便利だな”と思ったら記録しておきましょう。

### □離島勤務の実際について

私が間伏小学校で勤務した時には、各学年の児童数が10～15名でした。この人数だと、極端にやりにくいことはありません。困ったことは、体育のサッカーやバスケットボールなどの運動についてです。少ない人数で個人差を考えながら、どのようにチームを編成して、授業をいかに展開するかを悩むことはありました。算数科や国語科について言うと、成績が平均ぐらいに固まっている感じがありました。都市部では、私立中学校などの受験を考えて進学塾に通い、学校の授業よりも難しい学習をしている児童と、高学年でも九九に苦勞している児童が同じクラスにすることがあります。そのため、その差を埋めながら授業をする難しさがあります。

若松町には塾がなかったため、特別に勉強している児童はいませんでしたし、極端に学力の低い児童もいませんでした。そうすると、都市部よりも授業がやり易い反面、“多様な意見”に乏しくなってしまいます。算数の問題を解いて、正しい答えはでるけれど、同じような解決方法ばかりで、違うやり方がでてこない、といったことがあります。私の場合、ぬいぐるみを使って、「ライオンくんは、こんなやり方を考えているけど、どう思う？」と、間違った解決方法を意図的に提示し、考えさせたこともあります。そういった少人数に対応する授業については、離島での“僻地教育”についての研究や実践が行われていますから、赴任した学校で学ぶことができます。

離島勤務最後の1年間、大平小学校では、特殊な状態を経験しました。大平小学校は、極小規模校で、全校6名、全学年が複式の学級でした。私が担任したのは低学年、1年生の児童が1名、2年生の児童が0名。つまり、教室には、1年生

の児童1名と担任のみの、マンツーマンの1年間を過ごしました。休み時間は、全校児童と一緒に遊ぶとはいえ、ほとんどは2人で過ごすことになります。この時に感じたのは、教師としての自分の“引き出し”の少なさです。

日々の活動の中で、インターネットで調べている暇はない、その場で判断して、指導しなければならない場面が毎日続きます。そうすると、話すことに困ることがでてきました。1年生とはいえ、同じことの繰り返しばかりでは、飽きられてしまいます。例えば、「交通事故に気をつけよう」という話をする時に、何通りかの指導例が頭に入っているか、児童のためになるエピソードをいくつ語れるかということです。私は、その“引き出し”が少ないことを思い知らされました。

教師としての生活がスタートすると、仕事に追われて、目の前のことで手一杯になってしまいがちです。しかし、普段の生活の中で“学ぶ”ことを意識して、毎日を過ごして欲しいのです。学生であれば、授業に役立つとかだけではなく、とにかく様々なものを見て、触れて、自分の体験を増やしておくことが、将来に必ず生きます。

なお、江口は遠隔地を結ぶ中大連携に関与する大学生に対して、自分の離島勤務に基づいたサポートを展開している。2015年8月には長崎大学男女共同参画推進センター(現 ダイバーシティ推進センター)の学内学童保育「おもやいキッズ」における美術系イベントで、江口と井手がチームとなり、大学生の支援を担当してくれた。内容は大学生が考えたアイデアを、小学校の教員と中学校の教員が授業化して、異年齢の子どもたちに魅力的な体験を提供するものである。[註2]

「美術教育における遠隔地を結ぶ取り組み」は多くの問題を孕んでいるが、小規模校に在籍する子どもや、教員を目指す大学生や、彼らに関わる指導者や地域の住民にとって、優れた学びの場である。現在、大学が起点となって、教育現場で活躍している指導者間をつないでいる。それは子どもを幸せにしようと願う仲間たちと触れ合う場を創造する。ここに大きな意義がある。“遠隔地を結ぶ取り組み”は仲間たちとの出会いを形成し、将来の教育を担う後輩を育てることにつながるのである。

[註]

- 1) 中川泰・江口邦裕・山川昭大・松永恵介・井手淑子「美術教育における学校現場間の連携方法を探る」『教育実践総合センター紀要』(長崎大学教育学部)第14号, 2015年, pp. 206-207.
- 2) 松永恵介・山川昭大・江口邦裕・井手淑子・中川泰「カメラで世界を変えてみよう!」『教育実践研究フォーラム2015概要集』(長崎大学教育学部)2015年, p. 47.